

三河アララギ

平成二十八年

十二月号

第六十三卷 第十二号



ニューヨーク日記(122) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

Gnocchi with Truffles

Blue Shoe Diaries



天気が良い! 屋上にハーブと野菜畑があるレストランでとても新鮮な食材が自慢なレストラン、Rosemary'sで日当たりが良い所でランチ! 今日のスペシャルのニョッキのキノコとトリュフ和えをオーダー。味のバランスがとても上品。このままワイン飲んで一日過ごしたくなっちゃうよ。

The weather is gorgeous today! And that calls for a nice lunch at Rosemary's! They have a rooftop farm where they get many of their produce and it's located in a nice corner of Greenwich Village where you get so much sunshine in the restaurant. Once I heard that today's special was gnocchi with truffles, it was very simple. I just had to have it. And it was yummers! So delicate, so tasty, I may dream about this for a while...

目次

第六十三卷第十二号(通卷七五六号)

表紙・錦秋 今泉 由利(1)

ニューヨーク日記(122) Blue Stone(2)

黄素馨の門 御津 磯夫(4)

歌集「はゞきくさ」III 大須賀寿恵(5)

歌集「草々」 今泉 米子(6)

歌集「はゞきくさ」I 河原 静誠(7)

金黒羽白 鮫島 満(8)

陀兜囉の窓 岡本八千代(9)

信濃路 今泉 由利(10)

錦秋 弓谷 久子(11)

耕運機 内藤 志げ(12)

里芋の花 林 伊佐子(13)

栗御飯 安藤 和代(14)

天災 伊藤 忠男(15)

木屋 清澤 範子(16)

善意 阿部 淑子(17)

しまなみ 鈴木 孝雄(18)

月明り 森岡 陽子(19)

本宮山 白井 信昭(20)

呼吸器内科 近藤 映子(21)

生命力 杉浦恵美子(22)

薩摩芋 山口千恵子(23)

三輪山(2) 夏目 勝弘(24)

歌集「夢のつづき」 水上 信子(25)

私の一首 内藤 志げ(26)

森岡 陽子(26)

『いんよせ』 一いはとせ

今泉 由利(27)

牧原 規恵(28)

稲吉 友江(28)

鈴木美耶子(28)

吉見 幸子(28)

牧原 正枝(28)

石田 文子(29)

森 厚子(29)

山崎 俊子(29)

三田美奈子(27)

水野 絹子(29)

現代学生百人一首 東洋大学

藤田くるみ(30)

松沼 那奈(30)

藤田比奈子(30)

岩塚彩咲日(30)

岩淵 大輝(31)

丸山 香菜(31)

田中真巳子(31)

宮崎 偲永(31)

柳田 皓一(32)

山元 正規(32)

山迫 京子(32)

森岡 陽子(33)

田中 清秀(33)

重野 善恵(33)

今泉 由利(34)

松本 周二(34)

米田 文彦(34)

植村 公女(35)

田中 清秀(36)

『酔いの徒然』(56) 丸山醉宵子(38)

本からのあれこれ(13) 米田 文彦(40)

ある自然科学者の手記(55) 大橋 望彦(42)

絹の話(73) 今泉 雅勝(44)

短歌に詠まれた茂吉 六十三回 鮫島 満(46)

楽しい時間(49) 山本紀久雄(48)

漢詩研修 平井 茂行(50)

銀座の夜空はネオン焼け 高橋 育郎(53)

三輪山(2) 夏目 勝弘(54)

「氷魚」のことから(19) 岡本八千代(55)

ことのはスケッチ(45) 今泉 由利(56)

編集室だより(二〇一六年十月) 三河アララギ(58)

野菜の花(6) 鈴木 孝雄(59)

お知らせ・「三河アララギ」について(60)

『俳句』

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

補陀菓の那智の御山にふる雨はわが手の椰の苗したたらす

天皇の御筆の二行まがりゐて日本第一大靈驗所根本熊野大権現

ここに終はる王子のあとの杉むらも指し示しつつ雨に歩まず

漂流の裸形いつきて上人といはひつたへしいにしへの跡

滴水のしぶきに四度ぬれたまひしわれにしたしき新らしき過去

右の窓たちまちにして雨霧の宇久井の磯におらぶ白波

宇久井より見ゆる三輪が崎否定して強き一人をここにわがいふ

祓川はらひがはこころにもちてゆきにしを蓼枯れて赭しぬるる草畑

木の国の佐野のわたりはひろく積むパルプの材にふりしみる雨

契沖のいひしところと三輪が崎佐野もあたかも颯あげてふる雨

歌集「はゝきくさ」Ⅲ

大須賀寿恵

あぐらかけば真似る子来たりこの夜は食卓の下に病む足伸ばす

もの食ふも吾は気だるく坐りをり性教育の原稿あがりぬ

十年を朝々スモンの腹痛に耐へきて今朝も吾は起き出づ

身障者労はる会といひながら身障われに会費出せといふ

治療費の全てを国が持つといふ難病筆頭はわが病むスモン

毛細管が血を吹くほどに痛むなりこの痛みが今朝は上膊に来ぬ

コントロール一〇ミリグラムを水に飲む薬害あるといふコントロール

白菜漬音たてて食ひゐし末娘だしぬけに云ひぬ「寮に入るよ」

寮に入る子の荷の中に風呂敷より尾を出してゐる縫ひぐるみの犬

寮に入ってしまったひし娘の夜具かき抱き庭に干さむと降りたちて来ぬ

歌集 「草々」

今泉 米子

おどろより仙翁の花咲き傾き遠くはるかなるごとく思ほゆ

ひらききりし芭蕉広葉のゆらぐ風言ひつつ夕べの飯終へにけり

拭きあげたるグラス光れり子どもらの帰りてゆきし夜の光に

黒檀の杖は五十年前のものにぎりを繕ひて使ふにもあらず

道をめぐり帰り来れる夫の手に今日は野がりやすの紅さす一穂

いのちありて再び開くわが醫院金木犀の香りたつ日に

押入れより幾年ぶりに引き出だすボロの中より太刀も一振

ブエノスアイレスより来れる幼の手に採らせむ下枝に熟れし柿の実二つ

9と7の数字をいくたびも読みたがへ風の音遠き夜更けとなりぬ

紫香樂の大甕二つ露はれぬ草蘇鉄は実葉をのこして枯れぬ

歌集「はゝきくわ」I

河原静誠

この寺を営む保母とわがなりて骨までも浄くあれと励まぬ

一年の心の垢を浄めんと三千仏名会の会座に加はる

過現未の三世の諸仏護りませ園児と日毎われはたわむる

法華玄義のレポート今朝書きはじむ笹鳴きうつる庭の鶯

入院の身のまわり品調へしスーツケースに吾が猫のぼる

骨くさりと云はれて悲しよるべなくギブスベッドに吾が横たはる

人等みなうとみて去れど吾はただ弥陀の慈光に浄くすがらむ

去年の日よりわが培ひしシクラメンを今日は病棟の窓辺にかざる

吾が保育園の火災全燃のアナウンス耳をうたがふベッドの上に

焼あとに一本のこる紅梅の咲きそめて匂ふその梅の香を

金黒羽白

「月虹」 鮫 島

満

最新の版にやうやく除染といふ語を採りこみぬ広辞苑子は

潜水の手だれ金黒羽白らは重なる木の葉の下をも漁る

こゑ父はし大川口をにぎやかに渡るものらは雛をつれをり

思ひ出だしえざりし魚の名のひとつ北枕ふいに立ちあがりきぬ

浮き沈みして流れゆく柳葉は敢へてたとへば群るるいろくづ

屁のひとつふたつをなどかはばからむとは思へども意気地のあらぬ

屁風情といふ勿れよにうつくしき音色奏づる上物あるに

透かし屁は臭ふといふをわが腹に屁の子があまた騒ぎはじめぬ

肥沃土を日々剥がしをり毒なくばせざらむ除染といふことこれは

風景の骨格若き季来り石の裂け目に木の生ふる見ゆ

陀兜囉ダチュラの窓

蒲郡 岡本八千代

南みなみのガラスの窓に触れつつ咲くわれの陀兜囉ダチュラの白き花影

南窓一枚ガラスにダチュラ触れて今夜もにほふほのかな香り

文明と磯夫ダチュラと思ひつつ今夜も静かに窓を閉めたり

ま白きのダチュラの花の思ひ出の浮かびつつ閉める今宵の窓を

ダチュラの苗下されし時の思ひ出もそこはかとなく遠くなりつつ

懐かしき思ひ出もみな遠くなり今宵も寂しくダチュラの窓閉める

先月の十五夜の月と今月の十三夜の月は二夜ふたよの月とか

「傘に降る雨も愉しと」口ずさみ細道歩む己れのあはれ

「帰去来」の拓本下されし人思ふ白秋の生家の月川ヒロミ様

柳川にわが旅せしは十七年前「帰去来」の拓本今また読まむ

信濃路

東京 今泉 由利

からたち
唐橋に緑鋭どくとゲ立ちぬなぜなぜ何を拒みてゐるか

そばの種ひと粒ひと粒むかれるてつぶつぶやさしい雑炊ですよ

蓬けるも蓬けざるをも薄原この日この時この輝きを

やまなみ
山脈の向かふにもあり山脈は今日の朝日のあまねく届く

雪の日の近付く緊張伝へつつ雪吊り仕度ととのひてをり

野も山も枯れゆくなかにツンツンとまたの緑の魯田つづく

いちはやく焦げ色となるエノコ草ゆらしつつゆく信濃の道は

気高さは美しさを伴なひて覚悟偲ばる真田の郷は

人間の食と滅びぬナウマンゾウ化石臼齒は冷めたくありぬ

江戸よりか徒歩にて来られし岩松院へ北斎鳳凰頭上に懐くいだ

錦秋

豊川 弓谷 久子

見納めかと今年も言ひつつ子に連れられて錦秋顔見世大歌舞伎

馴染み深き舞台が嬉し菅原伝授手習鑑寺子屋の場

仁左衛門の松王丸なり亡き子を思ふこの名科白に共に泣く

石橋にはなやぐ獅子の舞姿目に残しつつ劇場を去る

鈍行の各駅停車も苦にならず観劇帰りの夜景楽しむ

十三夜の月明るしと子が呼びぬ虫の音絶えし庭先に立ち

若き日のはやり歌ひとふし浮かび来る「青い月夜の十三夜」

ソックスまで色を揃えて気分よし出歩く予定今日も無けれど

車椅子のくらしとなりし妹と暫し語り合ふテーブル囲みて

いつせいに咲きて香りし金木犀いつせいに散る今朝吹く風に

耕運機

豊川 内藤 志げ

耕運機にトレーラを連結し運転免許は特殊二二輪なりし

焼原こうしょうの工廠跡に目印は石にてコースの耕運機の試験

農協の婦人部会が縁なりき今日はランチに七人の集い

新城の道の駅より見下ろすは黄色の稲と家屋の点在

新城の道の駅より見晴かし三河の奥の空気を吸ひ込む

台風は夜明に通るの予報にて夜勤帰りの息子の時間

騒がれし十九号の台風は窓より覗くも沙羅の葉ゆれず

台風の返しの風にわが庭の竹の散り葉を悉く除く

糖尿病は己に作りし病なりアーモンド止め蜂蜜も止め

病から自分を守るは自分にて今夜も押し押し足裏を押し

里芋の花

岡崎 林伊佐子

仏焰苞ぶつえんほうの花かかげ咲く里芋の花は黄白しやくしき杓子の形

田の畦に群れ咲く赤き彼岸花ことしは新種の黄花みつけり

手のひらに受けて確む味加減朝どり野菜の旨き煮物は

半生を耳糜ひままに越えごえていつか身につく読唇術が

苦勞苦の苦をのり越えて難聴のひと世の嘆きもはるかとなりぬ

子や孫に囲まれ生きる倅せよすこやかにして傘寿迎ふる

老いて今生きた証を残さむと日々の雑歌を書きとめて置く

袖口は草汁に汚れひと夏の証の如く野良着の匂える

畑打ちてひむがしの空の透とほるころ仕事を終えて帰宅を急ぐ

夕昏む庭に萎びし紅芙蓉暑き日差しを越えたる象かたち

栗御飯

豊川 安藤 和代

どこ迄も真青な空百舌の声山茶花の実の割れて地に落つ

独り住むお隣りの老九十五庭に大輪の菊を咲かせて

虫の声少なくなりしを淋しいと夫はベッドで鶴を折りいる

冷やかな風に尾花は同じ向き意志ある如く単調の揺れ

栗御飯鍋いっぱいのなめこ汁囲む食卓幸せの秋

秋深み稲田濃淡個性みせ青空に映ゆ稔りがまぶし

来春の大学合格祈り込め孫と植えたるチューリップ三十

母の半天解きて作りしちゃんちゃんこの冬も又私を包む

生地薄く色褪れどもちゃんちゃんこ大好き大好き母の香のする

見て聞いてふれて感じて詠む歌に風のささやきを聞きとれずおり

天災

大阪 伊藤忠男

防災に向かへる我身不甲斐ない無力なりとも倉吉にをり
地割れあり家々傾き塀倒れ墓石は散乱目を覆ふなり
知られざる断層動くと予知学者また言ふだろう想定外と
次々と襲ふ天災なす術の無きまま齒痒き齒ざしりばかり
忘れぬ間にまたも災いこの国に天はこのごろせつかちすぎる
秋時雨追い討ちかくる倉吉の街は今なほ手つかずのまま
瓦落ち倒れかかりの古家に厳しき仕打ち秋時雨降る
諦めか怯えか慣れか町の人落ち着き払い黙々とゆく
余震への怯え顔には表はれぬ行き交う人々冷静のごと
救いありチャペルの健在今日の日にベル鳴り渡るベル高々と

木犀

春日井 清澤 範子

わが気持やや淋しく沈む日は夫は気づかひ励ましくくる

ようやくに職の決まりて吾が娘ブティックの店員となりて励みぬ

八王子神社はさっぱりと剪定され拍手の音空に抜けたり

押しボタン押して神社に参拝する夫と並びて祈りを込めて

台風から開放されたり散策に桜の花木紅く色づく

木犀はオレンジ色に花をつけ月もぼんやりオレンジ色に

秋晴れの今日病院の予約日なり紅葉映ゆる中央線に乗りて

吾が丈の二倍はあらむ泡立草刈られゆくなり清しくならむ

帰り来る時間と玄関に娘待つ木犀香りぬ月はまん丸

七才の歳の離れし夫と吾腰痛足痛共に言ひ合ふ

善意

横浜 阿部 淑子

つぎつぎと起こる災害痛ましく金木犀は香も告げず散る

いく箇所も骨折されし友人のギブスをはずす日共に待ち侘ぶ

鳥取の巨大地震の復興に役立ちたいと集まる善意

おめでとうリオの感動有難う都心のパレード八十万人

大隅さん(自食作用)の研究で蓄積実りノーベル賞を

しまなみ

沼津 鈴木孝雄

バスに乗りしまなみの海見下ろせどイメージ湧かぬ村上水軍

十年ぶりOB会に出席す懐かしい顔に伊予の訛

田んぼ変じソーラーパネルの置かれるは日本の農業行く末映す

マスコミはオートファジーで持ち切りに伝えて欲しい基礎研の危機

自衛隊海岸に来てキャンピング軍靴の音近くなりけり

宵待草黄色い花を空に向け輝き増せり暮合進み

パクチーの落ちた実からは芽がいつぱい畝蒔く種は未だ芽立たず

草取りで水仙の新芽を摘みそうに残暑続くも秋は歩進む

エゴマの花虫群れ来たり騒々しジジミ・セセリにクマバチ・ミツバチ

秋晴れだアカネトンボが狭い畑前後左右と喜びを舞う

月明り

東京 森岡陽子

月明り草群がる一所そこだけ騒がし虫の音騒がし

県道に沿ひ建つ家の庭庭は実り始めの柿の実小さし

そよそよと風に揺るる葉ゆれない葉何とも愉快様面白し

林檎剥くしみじみ友と語る居間微妙に合わぬ思ひ出思ひ出

選手等はブレザーきりりとメダル下ぐオリンピックもパラリンピックも

何気無く過ぎてゆきゆく日々にして花も果実も移れるはやし

秋うらら行き交う船を窓に見るアクアラインのバスの高さや

天高し武蔵野の風たてがみに葦毛の馬はペガサスとなる

パドックの桜の葉々の変はる時騎手乗せ新馬デビューに向ふ

月隠しほんのり明るく雲うかぶ風の無き宵月は出でぬか

本宮山

豊川 白井 信昭

二本ほどバンマツリ咲く花壇なほなほ咲き継ぐ九月尽の日

紫に咲くバンマツリ匂ひつつ秋の夕ぐれ白に移ろふ

スーパーの魚売場の器に泳ぐカレイワタリガニわが御津の海に

犬の「ハナ」十四年余り今日よりはドッグフード食わずなりたり

日は没^おちて家の外より鈴虫のあまた頻^{しき}鳴く秋深みゆく

夜な夜なを鈴虫のあまた頻り鳴く珍しくもなし川辺のわが家

スーパーの買い物後に妻と飲むミルクコーヒーまっさらな時間

神無月山並み遠く重なりて本宮山のさやけく聳^{そび}ゆ

多勢の来たりて見よ雲はるる本宮山のその全けきを

本宮の峰^{みね}見晴るかす頂に亡き恩師の歌碑ひとつ静もる

呼吸器内科

名古屋 近藤 映子

八月二十二日台風九号は関東地方を北上し北海道へ
我娘足をくじきて松葉杖それでも我検診日付添いぬ
久しぶり南部中学校三の五のクラス会は皆八十歳を
吸入をした一時楽なれば食事をすると思いつく
朝夕の涼しさ急に身に沁みぬ神無月に入つたれば
台風一過の晴天は夏日のごとく三十度過す暑さよ
痛む右手は休みなく痛い〜と使いて居りぬ
亀二匹大小共にやゝ大きくなりベランダの姿よ
夕ぐれて我家の亀は窓の網戸に手を掛けて中に入れてと
近頃の毎食は少量たりとも楽しみて娘と共に夕食を

生命力

蒲郡 杉浦恵美子

其其に名ありと云へど雑草よ我が庭覆へる炎暑の名残り

この夏の生命力の残骸を片付けをりぬ今朝肌寒し

梅幸と名付けられたる兄をりぬたつた三日のこの世の生の

梅幸と命名せしは祖父と聞く鼻肩の役者名孫に与へぬ

父描きし西浦の絵を入れしとぞ夭折兄の棺は蜜柑箱

採れたての酢橘求めぬ細やかに自ら祝ふ我が誕生日

同窓会に招かる秋の日何着やう我が日常と懸け離れてる

干支一巡せし間にこの子等職を得て仕事現場を生き活き語る

女子幾人幼子連れて男子等は近々父とぞ教へ子三十路

この子等と三年共にしたること凶らずも我が誇りとなれり

薩摩芋

豊川 山口千恵子

丁度よき大ききなり薩摩芋一株掘りて抱へて帰る

稔り田の間の道を横切りて素早く走るイタチらしき

駅までの田の道いろどる彼岸花老人会の人々植ゑたりと

白菜の葉を喰ふ青虫数多をり指先につぶす心おだやかならず

腰痛も少し治まるけはいなり黄花コスモス畑一面に

一枝の金木犀をビンに挿す匂ひ漂ふわが部屋にまで

柀の木に巢作りあきらめしか土鳩はこの頃すがたを見せぬ

コスモスの花を今年も咲かせをり休耕田の一際目立つ

忽ちに稲刈りとられ一面に穠生えある青々の田に

幾何の今年の米の運ばれ来ぬ一日三合の二人には余る

三輪山(2)

豊川 夏目勝弘

三輪山に沿へる道は木暗き道古代の人も通りし道か

三輪山に沿ひつつくねりくねり行く何はともあれ松原神社へ

松原社の祝が砂利踏む木靴の音いと爽やか背に聞きて行く

舗装道また野の道の追分に迷はず草の道を行くなり

山の辺の道の雰囲気感じたく行けば野道は跡絶えてしまふ

野の道を行きつ戻りつまごまと三輪大明神へ未だ拝さず

聚落を流れる小川に草刈る老い手を休めずに広き道ゆけ

家並を抜ければ舗装の広き道視界ひろびろ秋色の田

穫り入れも近き稲田のその彼方チヨコレート色のあれが大鳥居

三十分余り時間を失ひて三輪大明神の神蛇に一札

歌集 「夢のつじき」

水上 信子

ガジュマルの森に眠れる寺院跡女神の像は踊りをやめず
ガジュマルは遺跡寺院をわしづかみ幾百年を悠然と生き
ななかまど白樺ポプラ広き空ロシアの大地は故郷に似る
キリストはここにおわすか金色の玉葱屋根の教会の下
王宮の窓天井の金飾り遠き夜ごとの宴見えたり
ナターシャの白きドレスが幸せのワルツを踊る夏の宮殿
憂きことを心にまとい降る雪を傘に重たく受けて歩めり
こんもりと屋根に雪おき家々の静まりてある雪国を行く
ひとひらの重なり重ね屋根の雪地平に近く車窓を流る
垂れこむる雲に稲妻走りゆき白き畑野のかすかに光る

私の一首

草徑にチョトコイチョトコイの声高し澄みた空に響き消へゆく

内藤 志 げ

二十八年七月号

肺に持病を畑仕事も出来ず。自分の体に良い事は歩く事と、坂徑を下り藪に沿ひ歩く。

冬は陽当のよい朝、夏は日陰の夕方。春の気分の良い日姿が見えなくとも、高い藪の中よりチョットコイ。自分の中にその声が心に染み入る様な思い。澄みたの後に澄みたるとするべきだと思いますが。

アララギに助けられ何とか痴呆とまでならずお礼申し上げます。

親犬の十年間の庇護のもとすくすくぬくぬく子犬は育ちぬ

森 岡 陽 子

約二百グラムで産れたトイプードルの三匹の子犬達。産れた時はお祖母ちゃん犬も元気だったので三代目の孫

犬にあたる。帝王切開でのお産だった。母子とも元気で犬達はお乳を上手に飲み出し、母犬もやさしく舐め世話を始めたので先ずは安心した。毎度ながら開かない目でお乳をさがし、吸い出す産れたての子犬の姿には感動だった。離乳食から今迄一度も体調を崩す事なく、母犬より一回り大きく育った。

目に見えぬものは心に仕舞ひある父と母とをとり戻しつつ

今 泉 由 利

幼かったころ、「お座敷の、閉ざされた襖のむこう側では、三河アララギの歌の会、編集会がおこなわれているのだった」その気配を感じながら育った。

地球を知りたく、出掛けて行ったアルゼンチンでの見聞を、短歌に、随筆にして、三河アララギに参加することになった。

父母が亡くなってしまい「続ける」をモットーにしていらしたその望みを、「続けさせていただく」。残して下さった数々から、「父母と同じ心に」ゆきあたりつつ、「父母と一緒に」いる日々をとりもどしました。

『いじよとせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

とき忘るほどに畑にをりしわれつるべ落としのあかねの夕暮れ
水がめの水の漏れたる土の中小さきカメの姿ありけり

牧原規惠

猫の死に我に問ひくる我が幼「猫ちゃんは どうして お目、開かないの」
和菓子屋の老舗の店の閉ぢられてこの幡豆街道の景色変はりぬ

稲吉友江

猿島を孫と見てをり「猿いるの」「今はいないよ」われ答へつつ
ひとり帰る夕べの雲の間うすき虹あゝ虹好きなる友はいかがか

鈴木美耶子

英里さんの素的なスマイルウエディング姿我はうるうるメッセージの言葉
こんなにも我を慕ひてくれしかと姪英里に贈るフラワーシャワーを

吉見幸子

花々の殖えてしまひし花畑白き秋明菊は野の上に立つ
読み回^たみし本も資料もくくりたり務め収めの引継ぎ近し

牧原正枝

黙もくと空に向ひて蹴り上げる男の子のひとり鉄棒にぎりて
路地の中黒猫坐り道ふさぐ吾に目を向けつと脇へ行く

石田 文子

穏やかなけふの佳き日に宮詣りこのわが孫の幸せ禱りて
吾らそろひ産土参りに詣ずれば平らかなりし知柄の海かな

森 厚子

夏の旅のジャクサの帽子かぶりきて幼の話はカタカナ語多し
裏の家取りこはされしわが窓から青空の中うろこ雲つづく

山崎 俊子

レモン色の今宵の月は十三夜しづかに浮ぶ薄雲の中
うすむらさきの暈かざの真中に十五夜はしろがね色に輝きてをり

三田美奈子

蝉の声途絶へし朝厨あした辺の窓に広がる青き大空

益明けの稲生いのうの海に戯たわむれてベトナムの子等はメコンを懐おもふや

水野 絹子

現代学生百人一首

東洋大学

病院で大丈夫なのかと聞く母に家はとつけて大丈夫という

東京都立鷺宮高等学校一年 藤田くるみ

ネクタイをゆるめる父の金曜日明日は私がおはんをつくろう

東京都立鷺宮高等学校一年 松沼那奈

淡白でぶつきらぼうな言の葉は君の一つの恋愛表現

東京都立鷺宮高等学校三年 藤田比奈子

七十年そんなに長い月日かな忘れていくのは罪ではないか

東京都立府中高等学校三年 岩塚彩咲日

「あと一つ」歓声が沸く甲子園さあそろそろだ魔物が動く

東京都立府中工業高等学校一年 岩淵 大輝

日々熱き技能試験の夏過ぎて辛かった日の充足を知る

東京都立府中工業高等学校三年 丸山 香菜

難題に止まる右手を見てるときぼんやり思う未来の私

東京都立保谷高等学校三年 田中真巳子

黒板にうつすら残る日直欄あなたが書いた私の名前

京華商業高等学校二年 宮崎 偲^し 永^え

『俳句』

だんまりに時々釣れる鯊の秋

柳田皓一

お勧めの酒の旨さや走り蕎麦

立山は紅葉と黄葉と交りけり

潮焼けの手にあたたむる青蜜柑

山元正規

空匂ふばかりに柚子の黄のたわわ

野菊咲く日の暮れ残るひと処

多摩川の渡しの跡や草もみぢ

山迫京子

杖を買ふとば口の店秋の山

外に出て客を見送る十三夜

山の影伸びゆくはやし刈田道

森岡陽子

一切が山霧のなか鳥の声

溪流の岩に光りて鬼蜻蜓

信濃柿わづかに吊す大庇

田中清秀

往還の白壁続く薄紅葉

杜鵑草いほり訪ぬる人もなし

流れ雲途切れ途切れの十三夜

重野善恵

山里のところどころの紅葉かな

聞き馴れぬ小鳥の声に目覚めけり

天ぷらは菊の花ですひとり酒

今泉由利

伸び伸びし蔓も枯れたり自然薯

木瓜の花木瓜の実となる秋麗

青や黄も混ぜて煉瓦に蔦紅葉

松本周二

万葉の郷に降る降る木の实かな

さつと香の広がる車内青蜜柑

二羽三羽雀飛び立つ草紅葉

米田文彦

朝寒や窓開けて見る空の色

新蕎麦や猪口の模様の薄き藍

一灯や手帳にはさむ赤い羽根

植村公女

水の秋体内時計やや遅る

野良猫と黄ばなコスモス無人駅

金木犀散歩の犬の振り返る

ポケットの酸橘温みし旅はじめ

蛍光灯とり替え秋の燈灯しをり

ゆつたりと時流れをりすすき原

日展や上野の森の大道芸

かさね吟行会

「向島百花園」 十月

田中清秀

秋の七草は春の七草より馴染みがうすく覚えづらい。

覚え方をしらべてみると五七五七七で言うのが語調が一番良いようだ。「ハギ、ススキ、キキョウ、ナデシコ、オミナエシ、クズ、フジバカマ、秋の七草」。今回のかさね吟行会は秋の草花を求めて向島百花園を散策した。

平成二十八年十月十四日、十一時東向島駅に集合、どんよりとした雲に覆われた空模様幸いに雨は降っていない。実はこの庭園には三年前の十月に亡き喜仙主宰と共に訪れている。その時も今日と同じ様な曇り空で薄寒く何か因縁めいた感がある。「かさね」の平成二十六年一月号に記載があり、お持ちの方はご覧頂ければ幸である。入口の門柱に「春夏秋冬花不断」とあり、文学関連の植物を全園に配し四季の花々の絶えることのない花園を表している。文化文政の時代から江戸の文人によって花の咲く草木鑑賞を目的として作られ、およそ二百年の歴史がある。

草々の百花に埋もる秋麗

由利

雲淀む園のベンチの秋思かな

皓一

咲き終えてしまった名物のハギのトンネルは残念だが其処此処には種々の花が咲き残り、薄く色づいた雑木もみじが生い立っている。また、芭蕉の句を含め合計二十九の句碑と石柱が園内随所に建ち、庭造りに力を入れた文人墨客たちの足跡を偲ぶことができる。

文人の句碑をめぐりて竹の春

京子

園庭の句碑を囲める赤のまま

陽子

ほとんど一年中見られる薊はそのままで春の季語、秋に咲くのはヨシノアザミだそうで園内にも多く見られた。萼にとげがあり生命力が強く、また、食用にも供され天ぷらや茹でて和え物にすると美味しいらしい。因みに花言葉は「触れないで」とのこと。

散り際に群れなし目立つ秋薊

素山

小さき蝶来て飛んで行く秋あざみ

しのぶ

花の棚は幾つかあるがフジやミツバアケビ、クズなど

ほとんどは咲き終わっている。ただ、つる物の棚にはヒョウタン、ヘチマが栽培されおり、特に蔓が枯れてぶる下がるヒョウタンの愛嬌ある形が人目を引く。現代は飾り物として親しまれているヒョウタンだが昔は作物の種の保存や葉を入れる容器として実用的に利用されていたらしい。それでもお酒を入れて酌み交わす酒器として使われるのが最も馴染み深い。

茎枯れて棚を頼りの瓢かな
青ふくべ空を広げて下がりおり

清秀
正規

今年の秋は気候が不順で台風や雨が続き、晴れた日があれば肌寒い日がまたぶり返す。本来の透き通るような秋の空、赤とんぼの群れ飛ぶ公園、溢れる虫の声が聞こえる夕べなど秋らしさを楽しむことが少なかったように思う。今日はもう少し園内散策を続けながら秋の風情を見つけてみよう。

道塞ぎ括られている花芒
藤袴揺らしみて香をたしかむる

さち子
文彦

秋を愉しむのは風情だけではない。「小さい秋見つけ

た」「夕焼け小焼け」「もみじ」など数多くの秋の楽曲が知られている。そんな歌詞を口ずさみながら江戸時代から続く歴史と文化そして自然を兼ね備えた花園での吟行を続ける。昼食は園内の「御成座敷」で懐石弁当が用意されていた。この座敷から見ると庭の景色もなかなか美しい。句会はいつもの囑目三句の投句である。
歳月流るる如し、悠久の自然の営みに比して人間の一生は短い、そんな思いが浮かぶのも秋なればこそであろうか。最後に亡き喜仙主宰がこの百花園で詠まれた一句を記して置きたい。

あけびの実少年の日へいざなはれ
喜仙

■かさね吟行会■

日時 十二月九日(金) 十一時
場所 横浜赤レンガぞうの鼻辺り
集合 日本大通り駅みなとみらい線
申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（五六）

丸山 酔宵子

『世界で最も美しい本屋とポートワイン』

ユーラシア大陸の西の果てポルトガルの北、ポートワインの故郷ポルトは10月とはいえ、真夏を思わせる陽射しが、とんでもない急坂の石畳を照らしている。リスボンも坂道が多いが、ポルトの坂道は半端ではない。その石畳の坂に沿った町並みは、色とりどりのアズレージョ（装飾タイル）で飾られ、個性あふれるセンスで町全体が将に美術館。特に、世界で最も美しい駅のひとつとされるサン・ベント駅には約2万枚のアズレージョが飾られている。

駅に沿った旧市街に並ぶ歴史的建造物を抜けると一軒の本屋「レロ・イ・イルマオン」がある。その小さな入

り口を目指して国際色豊かな老若男女の長い行列が続いている。「世界で最も美しい本屋」と世界的に評判の本屋なのである。教会を想わせる荘厳な造りは、レトロなネオゴシックスタイル。見物料として3ユーロを支払うのだが、本を購入した場合は10%の割引をしてくれる。行列に並んで中に入ると正面には優美な曲線を描く赤い階段があり、「天国への階段」とも呼ばれている。店内にはレールが引かれており、書庫から木製カート乗せて店内に運んでくる。天窓のステンドグラスから降り注ぐ光に包まれた本が、壁一面に整然且つ知的に並んでいる。

古今東西の小説、詩、芸術、建築、経済政治からグルメ、ワインそしてキッズまでの様々な書籍が並んでいる。勿論ポルトガルの誇る御当地ポートワインの豪華本も並んでいる。イギリスの「ハリー・ポッター」のロケ地になったとのことで、さもありなんと感心させられる。

イギリスと言えばポートワインが大好きだが、本屋を

出て、石畳の急坂を下って行くとポートワインのセラーが集まるドウロ河のガイア地区に至る。

ポートワインと言えば、日本では現在の隆々たるサントリの礎を造った「赤玉ポートワイン」が有名であるが、それは本来のポートワインとは作り方も味も品格も全く異質なものである。ポートワインは世界三大酒精強化ワイン (Fortified Wine ポート、マデイラ、シェリー)

の一つで、ドウロ河上流で取れた黒ブドウを通常のワインと同じように醸造発酵させるのであるが、発酵途中に葡萄由来の蒸留酒 (ブランデー) を加えて発酵を止めて作るワインのこと。アルコール度数も1度から19度と通常のワイン (Still Wine) より高いのである。従って日持ちが良く、長期熟成したものが珍重されササビーとかクリステイーなどで高くオークションにかけられるのである。因みに「赤玉ポートワイン」は、世界的原産地呼称協定に抵触し、現在では「赤玉スイートワイン」と変

更して販売されている。

ガイアの河底から高い鉄橋のドン・ルイス橋を見上げれば、雲一つない青空が広がり、世界各地からの観光客でごった返し、河べりに並ぶオーブンテラスでビールやワインを傾けている。まだ夕食には早すぎるが、ここは、折角ポートワインの故郷に來たので、食前酒としてホワイトポートでポルトの夜のスタートとしますか……。

爽やかに石畳行くガイアかな

酔宵子

本からのあれこれ (13) 米田文彦

「題名」

文章を書く場合には、どういう内容のことを書くかが決まっていなければならないが、次に考えるのは、書き出しをどう始めるのか、ではないかと思う。

作家の随筆には、書き出しが決まると一気に筆が進むという話を何回か読んだという覚えがある。そして、なかなか決まらないのは題名だという。

何という題をつけるかで文章の内容もある程度制限され、広がりを持ち、自分の頭の中が整理されてくるが、この題名で良いのか?と考え出すと、もつと良い題名があるような気がしてきて迷ってしまう。

「吾輩は猫である」という題名、恐らく当時は画期的なものだっただろうと思う。「それから」「門」「硝子戸の中」などと並べてくると、漱石という作家は上手い題をつけているな、と思う。これはあの漱石の作品、と知っ

ているから影響されてそう思うのだろうか?

書棚を眺めていくと、それぞれ工夫したんだろうな、という題名が並んでいる。

永井荷風の日記「断腸亭日乗」は初めは「断腸亭日記」としていたという。

谷崎潤一郎の「卍」とは何?宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」手に取って見たくなる題名だ。

向田邦子「父の詫び状」、吉村昭「冬の鷹」、藤沢周平「橋ものがたり」、司馬遼太郎「竜馬がゆく」、池波正太郎「鬼平犯科帳」、それぞれ上手いなあ……。

須賀敦子「遠い朝の本たち」「霧のむこうに住みたい」。みんな、いろいろの思いがあって工夫しているのだ。

高校の国語の先生は、志賀直哉の小説の題名に感心していた。「暗夜行路」「網走まで」「城の崎にて」「濠端の住まい」「清兵衛と瓢箪」「小僧の神様」……。

そして、生徒の私たちは、そうなのかな、と聞いていただけだった。

高校には多くの著名な方々が教師をされていたのだ

が、猫に小判、豚に真珠、教えて頂いたことをしっかりと学び取っていた生徒はどれだけののだろうか、誠に申し訳なく……。

文学の老教授は窪田空穂に親交のある歌人、ドイツ語の髪長い先生は美術評論で著名な方だった、日本史世界史また然り。

大学になると有名かつ個性的な先生も更に多くなったのは、言ってしまうえば当然なのかもしれない。科目としての専門コースではない科目、つまり当時の教養コースとしての科目も一年生のときには割に多く、先生も学生の気持ちを心得ている雰囲気があった、と言っても差し支えないと思う。

例えば、経済学科の選択科目としての生物学では、学期末の試験の最後の問題は「岡田茉莉子について書け」というものだった。先生は授業中に「君たちに岡田茉莉子の良さは解らんだろうなあ」と言いながら映画について時間を割いたことが何回もあった。そして、試験のその問題に対して、映画スター岡田茉莉子についてきちんと自分の思いを書けば、とにかく落第点は免れるという噂だった。

「題名」のことに戻る。

高校の国語の授業として、何回も作文を課されたことがあった。では先生の推奨される志賀直哉の題名に倣ってみよう、という不遜かつ不埒な気持ちから、「出発するまで」という題の小文を書いたことがある。内容についてはほとんど評価されず、題名については結構良いというようなお言葉を戴いた記憶がある。このようなことがあって、私に「題名」についての関心が生まれたのかもしれない。

或る小説家は、「正月に、あらたまつて一人机で一杯酌みながら読むのは、志賀直哉なんです」と言った。

無駄のない端正な文体を手本として多くの著名作家が文章修行をしたという。

確かに、志賀直哉の小説を読むと気持ちがすっと真っ直ぐになる、背筋がぴんとするような安心した気持ちになる。そして、今まで何回も「暗夜行路」終盤の、有名な大山夜明けの描写などを折りにふれて読み返してきた覚えがあるのだ。

ある自然科学者の手記 (55) 大橋望彦

『生・若・老・死』

受験勉強4 (丸さんと共同勉強)

丸さんは、江東区で震災に会い家族の殆んどを失い、親父さんと二人つきりになって、神田室町にある近三ビル内、武田薬品の倉庫の二部に宿直室みたいなところがあり、其処に住んでいた。その倉庫の三階から更に梯子段で屋根裏に上がると、天井は斜めだが、かなり広いスペースがあった。何処から運んだのか、大きな黒板と机と椅子が二つ置いてあった。小生は、夏休みには信州に行つて、畑仕事の手伝いもしなければならなかったが、受験勉強が始まる頃には、家族の全部が、森川町の家だと何となく落ち着かなかつたので、丸さんと相談して、屋根裏で共同勉強をすることにした。判らないことがあればお互いに聞き合うことも出来、能率が結構上がった。今と違って、その頃は空調などが無いので、夏の暑い日は、照り返しが酷く、蒸し風呂の中のような屋根裏だったが、結構楽しかった。そして夕方になればロックフェラー図書館に通つた。

27) 「大学時代」(S 25・4・1) (S 29・3・31)

大学は東京教育大学(現筑波大学)理学部動物学科に入学した。大学の受験はドイツ語で受けた。問題はイソップ物語の中から二文が出た。ゲーテなどの文章から比べれば、極めて易しいといつても過言ではない。語学で点を稼いだのだろうか、無事受かつたものの、入つてからが大変だった。初級ドイツ語の時間はあつたが、初級英語の時間は無いのである。それでいて、英語は必須科目であり、その単位が取れないと、進学出来ないのである。A、B、C・・・の代りに、「いきなり」[Treasure Island (宝島)やBlack cat (黒猫)]の教科書を読まされ、英語の読み方も知らない小生は七転八倒の思いであつた。

親しい友人に谷宏君(たに)、永瀬金二郎君(ながせ、或いは金ちゃん)が出来、サボトリオ(略してトリオ)といつていた。共通の講義には誰か一人が出席して、他はサボリ、後でノートを借りて済みます。誠にけしからんトリオではあつたが、なかなかユニークな友達である。谷がピアノ、永瀬がピアノ、小生がヴァイオリン、とイッパシなトリオであつたが、ヴァイオリンがどうも上手くなかつた。皆揃つてヴァイオリンを習うことにして、それでもホームマン(入門教典)を上げた。三年生の時に専攻を決めたが、小生は永瀬と共に生理学を専攻した。生理学には代謝生理学と電気生理学があり、前者は高槻教授が専門で、後者は松井助教授が専門にしておられた。我々は、期せずして、高槻教授に就くこととなつ

た。生化学という専門科目はその時無かった。高槻教授の研究は「アサリガイの中綿腺に含まれるアミラーゼ酵素の研究」であった。

28) 「中原研究室でのアルバイト」

三年の夏休みに科研の中原研究室に試験管洗いのアルバイトをしに伺った。中原先生には前述の小生の生家の隣家におられた飯盛里安先生（日本化学会会長、同位元素の命名者、稀有元素の権威者、科研の主任研究員）が同僚である関係から紹介してくださった。その頃は、父が駒込に家を新築し、家族全員が移住していた。科研は、自転車に通える距離であった。

昼食の時に、室員全員がテーブルを囲んで持参した弁当を食べながら雑談のひと時が恒例であった。その時の中原先生のテーブル会談は印象的である。当時、蓮見事件ということが話題であった。茅野市に開業する蓮見医師というおかしな医者が出て、癌学会のことを独断で、権威を盾に取る、とんでもない学会である。町医者が癌に関する研究をまとめて、癌学会に発表しようとしても、全く相手にせず、発表の機会を与えてくれない。極めて横暴な学会である。と、ある週刊誌の記者に喋り捲ったのである。

それは兎も角として、そもそもその発端は、蓮見医師は患者に対して、いきなり患者を指差して「貴方は癌に侵され

ている。至急手を打たないと死んでしまう。この癌はある種のウイルスによるもので、丁度我々の手元にある、極めて抗ウイルス作用の強い免疫製剤を注射すればそのウイルスを排除することが出来る。どうしますか？」と、いわば脅しに近い語調で告知するというのである。そう言われた患者は真つ青になり「是非宜しくお願いします。」ということとなる。たちまち、茅野の病院の前は、大勢の患者がその薬を手に入れるためにひしめき合っており、門前市を為す如く成ってしまった。蓮見医師は、その当時大変高価なために中々手に入れることの出来なかった電子顕微鏡を購入し、彼が言う処のある種のウイルスはこういう形をしている。といってウイルスの写真を発表したのである。これら経緯を先生は手振りをつけて話されるので、大変迫力があつた。

後に先生が、岩波書店の「科学」誌に徹底的に科学的根拠の無いことを論破されて、更に、学会で一度取り上げ、どの様に幼稚な論証を挙げるかを示させる必要性を説かれた。後日、癌学会は彼の発表の機会を設け、病理学の菅野晴夫東大教授（当時、現癌研名誉所長）が司会をされた。その時の印象は、正に気の毒としかいえない状態で、ことごとく彼の証拠が間違っていることが立証されたのである。

絹の話 (73)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹の物性未確認基礎研究の必要 こんな研究しなければ!

絹を着ると「軽くてサラリトして柔らかく、ほのかに温かいが着ていて蒸れない。」多くの人が共有している絹に対するイメージです。

しかしこれらの絹の特徴を市井の人に判り易く説明出来る人は殆どいません。一般的な家蚕の絹に加えて各種野蚕絹が販売される様になり、なぜ野蚕絹なのか、なぜ蜘蛛糸が良いのか、絹の新たなニーズが美しく纏うから「健康」に向かっている今日、過去に研究されていても、今それらを整理、加筆して、それらの情報を消費者に丁寧に伝える事が、健康で安心安全、地球環境にやさしい絹販売の付加価値になるのではないのでしょうか。

絹はどうしてほのかに品よく温かいのか?

絹を着ると寒い時は重ね着するとフワット温かく、暑い時でも一重でいると意外に涼しいとよく言われます。保温機能と放温機能を併せ持つ繊維など、絹以外には見当たりません。絹はどの位の温度の範囲内に外気温を収

斂させているのか、調べてみる必要があります。

先ず繭で、家蚕をベースに、酷暑になるインドのタサール蚕繭、極寒になる中国東北部の柞蚕繭で調べたらどうでしょうか。

インドの酷暑の季節は40℃以上の外気温が続きますが、野蚕が生息する森の中の気温は幼虫の生息可能な40℃未満と思われまので、外気温40℃の時、繭の中の温度は何度に保たれているのだろうか? 同様に外気温36・5℃、35℃、30℃、20℃、10℃、5℃、-5℃なども調べ、タサール蚕繭は何度を境に暖房と冷房が切り替わるのか、柞蚕繭ではどんな差異が見られるか興味あるところです。

絹織物は繭と同様な機能を発揮するのででしょうか。

絹織物は人の体温36・5℃に対して、外気温の変化にどの様に対応しているのか、知りたい所です。

糸の形状、構造(緻密、多孔質)、糸の精練の仕方、糸の作り方(生糸、紡ぎ)や織り方、糸を作るアミノ酸の構成比やそれに含まれる色素等で機能に差異があるだろうか?

繭と生地の実験データと試着感触と一致するのでしようか。

絹を着るとサラリとしてべとつかないのは?

絹には保湿性と放湿製があると云われています。

絹は洗濯して干した時、綿の約3倍の早さで乾くので、湿度が高い時は放湿性に優れていて、身体から気化熱を奪う時間が短く、サラリとした爽快な気持ちになります。が、はたして湿度何パーセントの時、保湿性と放湿性のセイチチが切り替わるのでしょうか？

温度の時と同じ様な調査が待たれます。

絹の親和性とは

絹は親和性蛋白繊維だから着用して肌に抵抗感なく気持ちが良いと云われますが、もう少し詳細に研究する必要が有ります。

従来から絹は18種類のアミノ酸で構成された繊維と云われて来ましたが、2種類のアミノ酸は発見当時未分析で、まだ一般的に認知されていませんが、人と同じ20種類のアミノ酸で構成されているようです。

そうであれば親和性の説明は判り易くなります。

但し家蚕、各種野蚕絹は、それぞれアミノ酸構成比が異なっていますので、どの繭から作った物かによって着心地が少しずつ違うかも知れませんが、比較検討が待たれます。

繭から学ぶ省エネ

絹糸昆虫は4億年の歳月の中で環境に適応した命を守るカプセルを進化させて来ました。

繭の中にじっとして動けない状態で短い蛹で10日以内、長いもので2年をカプセルに守られて過ごさねばなりません。その間、生き延びられない様な外気温の上昇等を耐えられるギリギリの温度にまで下げ、雨が続く雨期に繭の中が水浸しにならない様に気化作用をフル回転させる機能、繭内に侵入する僅かな紫外線が無害な領域ギリギリの波長に変換してしまう機能、繭に付着した様々な雑菌を殺さないが繁殖させない機能など、いずれも生存に欠かせない機能性を有しています。日常起こる自然界の諸々の生命の脅威から身を守るため、その脅威と同居していてもそれらから自らが侵されない最低の防御装置をもって生存しているのです。余分なエネルギーは使わない。これが自然界の生存法則ではないのでしょうか。蜘蛛の巣やカマキリの巣、蜂の巣もみな絹です。絹は生物生存の為の構造物の最高傑作です。

最近人間の世界は殺菌だの防紫外線だのと過度にエネルギーを使い過ぎていませんか。

〇〇。削減が急務になって来た今日、昆虫機能の応用で効率の良い利用法が多方面に開発されて行く事を願っています。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人― 六十三回

「月虹」 鮫島 満

十八 橋本徳寿 2

ドウナウを船にくだりしさかんなるよはひ思ふに人
は死にする
『ララン草房』昭和二十年刊
ミュンヘンの冬をブリキの湯たんぽにたへつつま
しく君は学びき

前号につづく「噫齋藤茂吉先生」と題する挽歌の中の二首である。茂吉は大正十一年一月からヨーロッパに留学しその生活や見聞を歌集『遠遊』『遍歴』に詠んだ。右の歌は茂吉の手記や歌集を読んでの感慨である。

一首目は『遠遊』の中の「ドウナウ下航」で、「空合につづかむとするきほひにて『青きドウナウ』は今日こそ濁れ」「すでにして過ぎ来し森のかすむまで吾等の船はかくも速しも」「ひむがしに向ひ流るるドウナウの河にせまれる山も青しも」と詠んだ四十一歳の茂吉はついに逝ってしまったというのである。茂吉はドイツに着いた一月、ドウナウの冬を「ドウナウの流れの寒さ一めんに雪を浮べて流るるその音」とも詠んでいる。

二首目『遍歴』の中の「ミュンヘン漫吟 其二」（大正十三年一月）中の、「湯たんぽを机の下に置きながらけふの午前をしづかに籠る」「日本飯をけふも食ひたりおごりにはあらぬ儉約とこのごろおもふ」「納豆をつくるといひて夜も起きるる留学生の心ともしも」等からの思いである。

『たましひはながるるもの』とのみをしへはひとつ
おぼえにて常あたらしも 同

「たましひはながるるもの」は作者が茂吉から贈られた祝歌の初・二句である。この祝歌について作者は第五歌集『海峡』の巻末記に、昭和十四年に「短歌研究」に発表した「台湾樺太行」が歌壇に黙殺されたと述べ、さらに、

その『台湾樺太行』が、昭和十四年四月の大日本歌人協会の総会に於て賞された。然もそれは協会として、最初の作品に対する賞であつた。私はそれを心から名誉と感じ、いよいよ努力する覚悟を深めた一方、黙つてゐても、歌壇にいまだ具眼の士の健在なことを欣ばしく思つた。それと共に、一般歌壇の批評なるものが、いよいよ世俗的、迎合的であるやうに感じられてならなかつた。この協会賞に対して齋藤茂吉先生が、
たましひは流るるものぞ天ゆくや地ゆくやなべて

止まらなくに

の祝歌をくだされたことは、忝い記念としてふかく感銘してゐる。

と続けている。右の徳寿の歌は、茂吉の歌を教えとして思う時、いつも新鮮なものとして心に響くといふのである。

人麿の歌のいのちに没入しつつ大きなしみをやら
ひたまひきや

同

歌は、人麿研究に没入することによって茂吉は「大きなしみ」をやわらげることができたのだろうかという意味である。

作者のいう「大きなしみ」とは何か。茂吉は歌集『霜』の後記に、「昭和八年、昭和九年は私の五十二歳五十三歳の時に当る。然るにこの両年は実生活の上に於て不思議に悲嘆のつづいた年であつた。昭和八年十月三十日に平福百穂画伯が没し、昭和九年五月五日に中村憲吉が没した。さうして私事にわたつてもいろいろの事があつた。私のかかる精神的負傷が作歌に反映してゐるとおもふ」と書いている。

茂吉のいう精神的負傷は百穂、憲吉の死と「私事にわたる」出来事によるが、私事にわたることの大きな一つは妻てる子のダンスホール事件である。茂吉はかねて歌

聖として仰いでいた人麿の研究に没頭することによって悲しみを紛らわそうとした。人麿作品の評釈を始めたのは昭和八年十二月からであり、立て続けに『柿本人麿』五巻を刊行したのである。

『船舶の神なれば死なず』とてふたたび海にわれを
はげましき

同

徳寿は造船技師として第二次世界大戦に役立つことを思い、「開戦とともに渡南のねがひをおさへ難く各方面に運動」（『ラン草房』の中の題詞）し、「わがよはひなほいくばくか船を造りつくり造らむかへり見はせず」と詠んだ。そして、念願どおり軍属として南方に向かったが、「東支那海を航海中米潜水艦よりの魚雷三発命中、一万五千噸の巨体まもなく沈没す。闇中の海上にボートにてわづかにのがれ、一夜風浪とたたかふ。（中略）激浪にもまるること十四時間、乗員一千五百名のうち、助かりしは約五百名、十日長崎にひそかに上陸、十二日いつたん帰京」（歌集題詞）した。

そして訪ねてきた徳寿に話を聞いた茂吉は、「生死いきてのさかひを超えし君の顔つくづくと見て涙いでむとす」（『霜』）と詠んだ。そのとき茂吉は徳寿のことを「船舶の神なれば死なず」というようなことを言ったのである。徳寿は二ヶ月後ふたたび南方に向かう。

楽しい時間 49

山本紀久雄

2016年10月31日

2016年9月30日、国立民族学博物館の体験セミナーで「ネパール料理」を楽しんだ。

まだネパールには行ったことがないし、「ネパール料理」を食べることがないので、この体験セミナーは面白いだらうと、セミナー会場のネパール料理店「花菜 KHANA」がある高円寺に向かった。

高円寺は新宿からJR中央線で10分ほど、毎年8月に行われる「東京高円寺阿波おどり」で有名な街である。南口を出て賑やかなバルPAL通り商店街を入ったところすぐ近くに、インド・ネパール料理の「花菜 KHANA」があった。ここは「日本のインドと呼ばれる」地区だと、店のチラシに書いてある。住所は杉並区高円寺南3-58-25。

「花菜 KHANA」の読み方は「カナ」という。ということとは「KHANA」のHは発音しないのかと思いつつ、今回の講師である国立民族学博物館の南真人准教授にお聞きすると、発音はするが日本人には聞き取れないという。そこで、結局、「KANANA カナ」となって、漢字で「花菜」にしたのだらうと勝手に推奨する。

この「カナ」は二階に位置する。急な階段を上ると店の中はほぼ満席で、この体験セミナーの人数ぶりが分かる。参加者の中に、昨年カンボジアと北東タイへ一緒に旅行した顔も見え、11時

にセミナーが始まる。最初に南准教授が店のスタッフを紹介する。経営者のインシュワル・タパさん、支配人のギャネンドラ・パンディットさん、シェフのラージ・クマール・ケーシーさん、コックのアンバル・チエトリさん、ウェイターのダカ・ラージ・グルンさん。

簡単には覚えられない名前であるが、資料で確認してみると、タパさんはマガール人（民族）とあり、パンディットさんはバフン（僧侶）・カーストとあり、ケーシーさんはチエトリ（戦士）・カーストで、チエトリさんはチエトリ・カースト、グルンさんはグルン人（民族）とある。

これは大変な国だなあと、再び資料を見ると、次のように書いてある。

「多くのカーストとカーストのひとつとされた諸民族からなる階層的な複合社会で、カーストとは、世襲的な職業と結びついた、序列のある生得的な身分範疇。

理念形としてのカースト制『四姓（ヴァルナ）制度』で、ブラーマンハ司祭・僧侶、クシャトリアハ王侯・武士、ヴァイシヤハ庶民、シュードラハ隷属民、ハリジャンハ不可触」

名前も難しいが、カースト制度も大変だ。これを知らないとい今日の「ネパール料理」は食べられないのかと、一瞬、思ったが、そうではなく、親切な南講師がネパール概況として整理してくれた資料が真面目にできているからで、期待の料理は勉強と関係なく、厨房から運ばれるとのこと。これで安心だ。

さて、食べる前にふたつの映画が上映された。

1 『ネパール 山村の結婚式』 30分

2 『ガイネ』 15分

1は、ヒンドゥー教による実際の結婚式状況で、山村の結婚式と、都市の結婚式を比較しつつ、婚礼の段取りや、そこで披露される伝統楽器（パンチャイバージャ）の演奏風景と、それが都市と田舎との違いや、時代の変化で変わって来た内容が紹介されたが、この小文での解説は不可能である。それほど日本の結婚式とは大きく異なっている。

2は、ガイネで、これは現在「ガンダルバ」と称される楽師カーストである。伝統的弦楽器・サランギの演奏を職業としているものだが、これも時を経て大きく様変わりしたことが紹介される。さすがに国立民族学博物館、1982年に撮影したものと、約30年後の2013年に、1982年当時の取材対象となった人々を探し訪ね、当時の映像を見せ、現存する家族たちがどのような反応を示すのかという、興味深い映像シーンの数々を紹介してくれた。

前置きが長くなってしまうが、料理の準備に時間がかかったらしく、実際に食べ始めたのは14時ごろ。以下のメニューがテーブルに運ばれて来た。

- ①スナック・・・干し飯チウラと煎りダイズ、鶏肉のチヨエラ
- ②ダール（豆汁）・・・黒いダールとグンドウルツクの汁
- ③パート（ご飯）・・・バスマティ米
- ④タルカーリー（野菜のおかず）・・・ジャガイモ・葉物野菜
- ⑤アチャール（漬物）・・・トマトのアチャールとダイコンの漬物
- ⑥サラダとパバード・・・ダイコン、ニンジン、キュウリ、パバード（豆の粉の薄焼き）
- ⑦チャとミタイ（紅茶と菓子）・・・ミルクティー、ニンジンの甘

煮と米粉の薄パン



出された料理をまとめて撮影したが、写真のどれが、どのメニューに該当するか。実は、お腹が空いていたのであつという間に食べてしまったので、ここで解説できない結果となった。しかし、結構、味はよく、美味しさは口の中に残った。

また、経営者のタパさんが、客を迎える際のネパールの習慣だと言つて、一人ひとりの首に細いイエロー絹地のスカーフをかけてくれたが、これもどういふ背景から発生したのか、これも聞くのを忘れたので解説できない。いずれにしても、ネパール料理はメニューの②ダール（豆汁）、③パート（ご飯）、④タルカーリー（野菜のおかず）、⑤アチャール（漬物）によって構成されているとのこと。

来年1月に南准教授が引率してくれるネパール旅行に参加するので、現地で詳しく、もっと多くのネパール料理を楽しんでみたいと思つているので、その結果をまた報告したい。

漢詩研修

子夜吳歌

長安一片の月

秋風吹いて尽きず

何れの日か胡虜を平げて

李

万戸衣を擣つる声

総て是れ玉関の情

良人遠征を罷めん

白

平井茂行

【解説】子夜呉歌は楽府題の一つ。「子夜歌」ともいう。長江下流の呉の地方に流行した歌曲で、六朝東晋の時代に子夜という女性がこの曲を作り、歌いはじめたが、その曲調はなほだ哀切だったという。李白は古い歌謡や地方の民謡をもとにした歌行にもすぐれ、もとの歌の調子をふまえながら、奔放に歌の世界を広げていった。東晋の都は昔の呉の地にあつたことから「子夜呉歌」と言つたのである。この詩は春、夏、秋、冬の四首から成つていて、これは、その秋の詩であり、四首中、最も有名である。もと南方の歌である「子夜呉歌」を北の長安を舞台に仕立て、秋の月と風と砧の組み合わせのもとに、長安にいる妻が明月の夜に、出征兵士の夫を慕う情を述べたものである。新しい閨怨詩に作り上げている。民歌の活力を取り入れ、古い革袋に新しい酒を盛つた、李白らしい作といえよう。

李白が七三九年（開元二十七年）安陸（湖北省安陸県）の白兆山にいた時の三十九歳の作か、もし長安で作つたとするならば、七四三、七四四年（天寶二、三年）頃の作品と考えられる。

【語釈】

*長安……唐の首都。現在の陝西省西安。出征兵士の夫を思う妻のいる所。

*一片月……二つの月。片われ月ではない。あたり一帯に光を注ぐ月の意で満月を考えなければいけない。

*万戸……どこの家も、すべての家が、の意。

*擣衣声……砧を打つ音。秋になると冬の用意のために絹布をたたいて柔らかくし、つや出しをする、その音。

*総是……上の三句をうけて、月、砧を打つ音、秋風、これらのものすべてという意。

*玉関……玉門関のこと。甘肅省敦煌県の西にある、唐代における最西北の関所で、中国から西域へ行く出口。長安を去る三千六百里（約二千km）の所にある。現在も漢代玉門遺跡はあるが唐代のものはなく、詳細な位置不明。西域から出る宝石の玉が、ここを通じて中国に運ばれたことが名の由来。

*胡虜……西北の異民族。

*良人……夫のこと。

【通釈】澄みわたった長安の夜空に月がひとつ下界を照らしており、どこの家からも砧を打つ音が寂しく聞こえてくる。そしてさらに、秋の風は絶え間なく吹き続けている。月光、砧の音、秋風、これらはすべて家に留守している妻の、玉門関にいる夫を思い慕う情を引き起すものである。

いったい、いつになったら、愛する夫は西北の異民族を平定して、無事に帰ってくるのであろうか。その日が待ち遠しいことである。

【鑑賞】「子夜（呉）歌」はもともと南方の歌である。それを李白は、北の長安の都で留守をまもる妻の歌に仕立てた。原詩のもつなまめかしさに、しっとりとした愁いの情がとけあつて、新しい詩が出来たのである。李白は古い歌に題材をとって、新しい歌を作り出すことを積極的に推し進めた。

李白の大きな特色の二つである。

時は秋の夜、くまなく照らす満月（視覚）、かなしく響く砧（聴覚）吹きやまぬ秋風（触覚）といろいろな感覚に訴えて、寂しさはいやます。

それはすべて、玉門関にいる夫を思う情をそそのめるのだ。最後の二句は、意味の上で蛇足だとして削るものがあるが、ここで「いたい、いつになったら、えびすをやつけて帰ってくるの」と妻に言わせることにより、てんめんなる情緒がただようのである。作者はわざと六句の古詩にしているのだから、これを四句の絶句にしてしまつのは、作者の意図を無視することになる。

銀座の夜空はネオン焼け

高橋育郎 作詩

ネオンのひかり 赤 青 黄

ネオンのひかり くるくるまわる

人はどれほど 通るでしょう

ぼくにはちつとも わからない

見る人 見る人 ネオン酔い

ネオンのひかり 赤 青 黄

ネオンのひかり くるくるまわる

車はどれほど 通るでしょう

ぼくにはちつとも わからない

ガラスにネオンの 灯がうつる

ネオンのひかり 赤 青 黄

ネオンのひかり くるくるまわる

悲しい人は どこでしょう

うれしい人は ほほそめて

銀座の夜空は ネオン焼け

三輪山(2)

夏目勝弘

柳本を過ぎ、次は巻向その瞬間に巻向で降りろ、声なき声
がした。

桜井まで行き海柘榴市から初瀬川を渡り、三輪山に登る予定
であった。無意識の行動で巻向駅に降りてしまった。

そうめんの道の駅で、三輪そうめんの大盛で腹を満たし、穴師
の里を通り三輪山に向うことにする。(巻向・穴師は敲をあらた
めて書くこととする。)

三輪大明神へは、三輪山の裾を通る、古代よりの道を行き、松
原神社に参拝し舗装された広い道と、平行する野の道に出た。

山の辺の道らしい野の道を選び、草を踏みながら行く。

山畑への道もあるため、行きつ戻りつ歩いて行く、松原神社を出
て二十分は歩いている。

しばらく行くと聚落があり、小さな流れの所で草を刈る老人が
居た。三輪大明神はと聞く、この道は遠回りになる。広い道に出
て行き左に行けば、すぐだと言う。

聚落の細い道を抜けると、刈り入れ間近かな稲田の広がり、田
一枚方を区切るように今を盛りと彼岸花の赤い帯が伸びている。

彼方に久しぶりの秋の青空に、三輪大社の大鳥居が見える。道
は一直線に参道に続く。

山の辺の道に固持したため、時間をロスして、自ずと早足とな
りようやく一の鳥居の前に、一礼し砂利の広い参道を進む。

擬宝珠を修理中の小さな橋を渡り、拝殿への急な階段を上り、参
拝もそこそこに登拝のある狭井神社に向う。

参道を六百メートルほど、緩やかな坂を行く標高八十メートルの
狭井神社に着く。

社務所にて入山料三百円を払い六五番の参拝証のタスキもら
う。御神水百円を買う。

狭い登拝口の前で下山してくる二団を待つ、若い女性は素足で下
りてきた。泥で汚れた足の白さが艶つやしい、尻餅を付き花柄のパ
ンツが泥まみれになっている。

登拝者の多くは若者中年老年にかかわらずカップルが多い、女
性どうしのグループも居るが、一人での登拝する男性は少ない。

古代よりの信仰の中心であった、三輪山そして三輪山を三輪大
明神を万葉人も長歌短歌に残している。

○味酒を三輪の祝がいはふ杉手触れし罪か君に逢ひがたき (巻
四712・丹波大女娘子)

拝殿の前に空洞の老杉がある。その中には神蛇(巳さん)がい
るといふ。

○三語の神の神杉夢にのみ見えついでねぬ夜ぞ多き (巻1156)

○三輪山の山辺まそゆう短かゆうかくのみゆ糸に長くと思ひき
(巻1157)

○山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく (巻
21158)

以上三首は、十市皇女とちひがなくなつた時に高市皇子たかちひのみこ尊が作られた歌
○うまさけ三輪のはふりが山照らす秋の紅葉の散らまく惜しも
(巻11517) 長屋王

○三輪山をしかも隠すか雲だにも心あらなむ隠さふべしや (巻
118)

額田王が近江の国に下つた時作つた歌
この首のように三輪山を信仰の拠り所として崇め親しんできた日

日、近江に都が遷され天智天皇の許に向われるときの思ひの二首。
記紀にある有名な三輪山神婚説話のためか恋い思う歌が多い。

現代でも年齢を問わず、カップルの参拝者が多いのも何かの因縁か。

「氷魚」のことから (191) 岡本八千代

先日、NHKテレビで「漱石の妻」を観た。ちょうど、最終回、漱石の修善寺の大患のクライマックスで、夫婦のありかたに考えさせられた。漱石と鏡子の個性がいかに現代的で、夫が理不尽なことを言つて強いと妻の方も自分の考えを言い返す。従順でない面白さ。いや、当時は、妻の方が強く言い返したにしても哀しかったと思つて観ていた。自分にも当てはめて。……。

ここからは、結婚前の漱石にもどる。

子規は、明治22年5月1日付で「七草集を読み給える君たちに申す」、その冒頭の文。

「おのれ去年の夏、牛嶋長命寺にかりやどりしぬ。焼くが如き熱さにはなすこともなくて、ひねもす内にたれこめ机に向いれば心苦しき事いわんかたもなし。されど最早都に帰るべき日も近づきたり。若し帰りて後、友だちの「日々墨田に耳を洗い、都鳥を友として何をかなしつる。向嶋の土産はありやなしや」と問われなば何と答えん」

と、記していた。つまり、長命寺滞在の土産がわりの一篇としかかったであろう。そして、七草集を読んだ友人たちの感想文を所望したのであった。

漱石のところへ「七草集」がまわってきたのは、五月の末だった。

漱石は、こう書いた。

「去年七草集拜見せし折は何でもほめてやつたら嬉しがるだろうと親切心からでこくの漢文尤もらしく製造してえらいかな先生書いたりや隊長と無上に持ち上たところさすが獨尊の君もあまり嬉しくなかつたと見え無暗矢たらに人の文をほむる者ではないほめ過ぎたるはなおほめ足らぬが如しすこしは悪口も雑ふがよしと御小言頂戴仕りて……。」と。

右の文の「隊長」は明治時代のはやりことばで、のちの「大将」とか「大統領」などにあたる。「雑る」は「まじる」「仕りて」は「つかまつりて」になる。そして、漱石は、この数か月後に「木屑録」を書いたのであった。——余ほど漱石も、「それなら自分も何かを書いてみせる」勇氣のようなものが湧いてきたような気がする。そして、この批評のおしまいは「辱知 漱石妄批」と署してあったのである。これがはじめて「漱石」という号をもちいたのであった。ここから生涯を通じて筆号になったのであった。

また、批評文に「こういうところもあつた。」
「不知吾兄、校課之餘、何暇綽々能如此。僕天資陋劣、如疎懶為風、齷齪没于紅塵裡、風流韻事蕩然掃、愧于吾兄者多矣。」

子規に対して「勉強の他に、どうしてこうも悠然とこんなことをやつていられる余裕があるのかねえ。ぼくは生まれつきできが悪いうえに、怠けぐせがついて、俗事だけで手いっぱい。貴兄に比べてはずかしいよ」と。

(高島俊男著「漱石の夏やすみ」参考)

ことのはスケッチ (455) 今泉由利

明治三十三年 八月 明星第五号

「明星」②

京扇 中濱糸子 (東京)

新詩社詠草 中濱糸子 (東京)

○うるはしき絵扇とりて立ちたまふ袖より長し白藤の花

○おもとたち衣がえしてみすかげの涼しく見ゆる殿の内かな

○水がめに水さしうふる姉君の島田にゆらくしる藤の花

露草 山川とみ子 (大阪)

○君よ手をあてて見ませこの胸にくしき響のあるは何なる

○筆をりて歌反古やきてたちのぼる煙にのりてひとりいなばや

○知るや君百合の露ふく夕かぜは神のみこゑを花につたへぬ

鳳 晶子 (和泉)

○誰が筆に染めし扇ぞ去年までは白きをめでし君にやはあらぬ

○わが草にしばしは想へあたらしきこの恋塚のぬしを語らむ

小生の詩 与謝野鉄幹

○君ゆゑに瘦せたるわれと告げもせば相見るをだに母はとがめん

○世のかぎりふところにして泣きぬべき文をもせめてたまへとぞ思ふ

思ふ

簾影 落合直文

○たゞひとつひらきそめたる姫百合の花をめぐりて蝶ふたつとぶ

○うつしゑのうすくなるまで年へてもかへりきまさずわが恋ふる君

○市に行きし乳母はかへらずさよ更けて経よむ窓に雨ふり出でぬ

○朝庭に髪もけずらでかぞへみる白きむらさき朝顔の花

○なく虫の庭しづかなるあづま屋に姫の召します筆紙硯

○花園の離亭の縁に雨よけてゆかしき人に言かはしけり

○車井にぬれてとばかりまぎらしぬ涙といわば人のとがめむ

○歌反古をやきてすてたる夕より鳥も歌はず蝶も来ずなりぬ

○蕈の月うかぶとみれば行く水に影さす我の扇なりけり

鳳 晶子 (和泉)

○夏の野を絵にする君が肩によりひともとさける姫百合の花

山川登美子 (大阪)

○刷毛の黒絵に似たる夕島に小鳥さわぎてあわき虹たつ

与謝野鉄幹

○明日知らぬ命すくへと書けるふみ日附は二日今日は十五日

○うれしきは越後の山のしら雪を口にふくみて君がよめる歌

○わが恋を人にゆづりて鎌倉の禪師が許に飯たく男

明治三十三年 九月 明星第六号

雁来紅 中濱糸子 (東京)

○うかり入れてところの名をば問へるかな夕顔さけるたそがれの宿

○きぬ帽にわが歌かきて潮あぶる君がかたへと流しやるかな

○月かげに磯めぐりして又もききぬ長谷のみてらのあかつきの鐘

○たかどのの糸のしらべにあはずとも星のみやこに神ききまさむ

○夕川に水くみをれば流れきぬ扇にのせし芙蓉ひと花

○をみなこのふしめがちにもなりにけり苦屋をてらす稲妻のかげ

○むぎわらの帽子ふかめて行きすぎぬ口とき君が濱つらの宿

登美子の君へ二首

○病む君の心もとなき筆の跡をむねに抱きて泣く夕かな

○あめつちに二人の友の病むとききて涙せきあへぬ秋の初風

明治三十三年 十月 明星第七号

清怨 中濱糸子（東京）

○御手とりてぬぐひまつるも今日のみよ君が泣きます小屏風のかけ

かけ

○西ひがしさらばと云ひて別れては森のまぎれに我名しるして

（友に別れける時）

○舞殿に君が手とりし夜半よりのわが思をや恋と云ふらむ

○しらじとてかざすか絹のしろ扇にほふ片頬の透きて見ゆるよ

○星かげにてらして見ればやさ文よねたきは誰のばらの移り香

○絵筆なげてながむる姫の舞ひ姿うたの御声よなどかちいさき

○手拍子にまじる小唄のやさ声は姉妹と小萩しる菊

○ぬぎすてしゆかたの袖にわすれたり誰にともなき文のひとひら

○歌反古を焚きしけぶりの鬼となりて夜半の小雨の涙ふらすか

山川とみ子（大阪）

○あたらしくひらきましたる歌の道に君が名よびて死なんとぞ

思ふ

○君のみはあはれと思せ弱腕にしらべ乱れぬ泣きてとる琴

○てづくりの葡萄の酒に君を酔はせ都の歌を強ひまつるかな

鳳 晶子（和泉）

○あたらしく湧く我胸のましみずふるき愁ひを洗ひませな君

○ことばにも歌にもなさじ我が思ひその日その日るとき胸より

胸に

○やわ肌のあつき血しほにふれもみでさびしがらずや道を説く

君

中濱糸子の君へ二首

○まだ知らぬ友の名よびて浜寺の松に泣きし子君しりますか

○わが歌に君が筆乞ひ君が歌を小琴にのせん月清きころ

与謝野鉄幹

○われにまつ毒味せよとは云ひ得たりゆるせ称二つに割らむ

○あめつちに二人の才と思ひしは浅かりけるよ君に逢はぬ時

○この雨を百二十里の西にもてひとり聴きつゝひとり泣くらむ

○ほゑみて火をも踏むべき二人なり神もたのむな世の人なみに

つづく

編集室だより【二〇一六年十月】

○江戸時代の発祥、詩歌にゆかり深い草木が多く植えられ「春夏秋冬花不断」「東西南北客争来」の向島百花園にて吟行。「御成座敷」かつて芭蕉の奉られていた「芭蕉の間」にて句会。園内の「茶亭さほら」よりの「和食弁当」に「上選酒合」ほどをいただきますながら、下町の味を堪能。

「俳句」で決められた季語には収まらないここ百花園を、心ゆくまではみ出した句作となる。

○三河アラragiの、校正が印刷所より届く。一人では心もたない故、森岡さんにお手伝いいただく。二人でしっかりと校正をしたつもりでも、びつくりするような間違いをってしまうことがある。よろしくご指摘、ご指導いただけますよう。

○校正を印刷所に届け、一週間すると「刷りたて、完成三河アラragi」が届く。

お届けする皆様により近くに居られるよう、一冊一冊封筒に入れ、宛名を書き、切手をはり、ポストに入れにゆく。ポストがぎつしりになるほどに入れ終ると、発行所の近くのビルの屋上レストランへ、夕日に輝やく富士山が見られる。今月号も無事お届け出来て良かった。

○真田十万石の城下町を巡る。「松代城跡」「真田邸」「真田宝物館」「文武学校」…松代の、キョウツと引き締つた空気をクリーンな佇まい。異次元にわけ入った。

○十割手打ち新蕎麦。地酒。生涯残るだろう滋味。稔りたて

蕎麦の種の皮は、ひと粒ひと粒むかれて雑炊。本当にありがたいおしほ。

○信州・小布施、山と畑とに囲まれた「岩松院」本堂の葛飾北斎最晩年の作品、「八方睨み鳳凰図」いつまでもこの図の下に居たかった。

○妙高高原サンシャインホテル、冬に閉ざす最後を泊る。部屋の間までゆきとどいた、リラックスリラックス。庭の植木の、降雪に備える手厚い手当。その美しさにみとれる。

○「岡倉天心：六角堂」。紅葉の木々に、白い霜が降り、金色の天心先生の存在感。ここより日本美術を見張っておられる。

○池の平「いもり池」。池面に妙高山を写すはず、でも頂上付近は雲に覆われている日だったから。すいれんの丸葉がしつかり池を守っているみたいで可愛い。妙高の四季を想い描く。

○野尻湖。ナウマンゾウ博物館。氷河期、四万年前の地層から、ナウマンゾウの骨の化石、すぐ近くから、人間が作った道具や石器が発見された。野尻湖人はナウマンゾウの狩をし、食料にしていた、と知る。

○「小林茶旧宅」「茶記念館」。

茶の生涯、二万句にであえた。ご自身から進つた真実を詠まれる。しみじみと、お教えいただけようと思に至る。

○善光寺。

宗派の別のない、日本最古と伝わる光三尊阿弥陀如来を本尊とし、檜皮葺の鐘楼よりの梵鐘。私の一生に、ここに來られたことのうれしさに満ちた。

野菜の花（6）

鈴木孝雄



○ 薺の花

6弁の白い花の散形花序は美しい。花もニラの臭いだろうと思って、鼻を近づけてみてびっくり。なんとほのかな芳香。葉菜類は、とう立ちする前に蕾は摘んでしまうのが常で、今までニラの花を嗅ぐことはなかった。まさに嬉しい発見だった。

ニラの花は蕾の花茎が食べられる。

ハナニラと言えばアルゼンチン原産の園芸植物で、このハナニラは、葉の形状と臭いがニラに似ていたため、日本では「ハナニラ」と命名された。春先に花茎の上に、白から薄紫色の星型の花を1つ付け、雑草のように色々な所に群れを作って咲く、英語ではSpring starflower、ニラの英訳Chinese chiveあるいはGarlic chiveと全く異なる。このハナニラは毒性があるので、食用しない。

東アジア大陸原産のニラ（薺）は中国では3千年以上前から栽培された。日本には弥生時代に中国から渡来し、古事記や万葉集に記述がある、古くから薬用食物として親しまれてきた。一般的な食用になったのは餃子などの中華料理の普及の影響である。

ニラは根元から切って収穫するが、葉は1日に3cm位伸び、20日もすれば次の収穫が可能、さすが精力野菜。その分、十分な水と肥料が栽培の肝。

今回は、春菊の花の予定です。

お知らせ

△新年号の原稿は、十一月三十日（水）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月のお原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の一六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇一六―五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六A

TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美